

北見ワークショップ報告

1 日時：2018年10月9日（火）10時30分～15時40分

2 場所：北海道北見北斗高等学校視聴覚ホール

3 参加者：関係者をいれて61名

4 内容の概略：

(1) 学校長挨拶（北海道北見北斗高等学校 渡部道博校長）

・英語の教員だがお金の教育が不足している、という問題意識を持っている。本日は、経済教育ということで期待しているとの挨拶があった。

(2) 講演「交通の経済学」（慶應義塾大学商学部教授 加藤一誠先生）



講演する加藤先生

・表記のタイトルで以下のような内容の講演をされた。

- 1) 航空運賃には独自性がある。それは一物一価ではなく、同じ区間でも運賃が異なることである。また、国内線では大手がほぼ同じ運賃であり、航空会社に価格決定力があるようにみえることである。
 - ・なぜそうなるか。運賃に関しては、価格差別が行われているからである。それは弾力性の問題でもある。また、日本では JAL と ANA の大手が LCC も含めて系列化して一定の価格決定力を持っているので、価格差別ができるのである。
 - ・鉄道も似た構造を持っている。鉄道の場合は、「ジパングクラブ」「青春 18 きっぷ」が価格差別にあたる。ただし、繁忙期はダメ。空いている時期が対象。なぜなら、どんな状況でも鉄道は走らせなければいけない。そのため、一定のコストが必ずかかる。本来なら、弾力性が低い会社員や学生さんから高く取ればよいが、それは公共性からみてできない。
 - ・この場合の公共性というのは、もしそんなことをすれば生産費が上がり、移動が減って経済への悪影響があるからである。みんなのためということだけではないことに注意したい。
- 2) 供給サイドからみた交通に話を移す。
 - ・完全競争と寡占の違いから話をすすめる。食品用ラップは商品名が言える。しかし、好きなリンゴの生産農家名はいえない。それは、前者が寡占、後者が完全競争だからである。この世の中には寡占市場が多いし、ほとんど同じ会社から購入しているものがある。それは電気。ところが電気は2000年以降大口需要者は自由化され、2016年以降は小口需要者も自由化されている。
 - ・電気がなぜ独占、寡占なのか。それは自然独占の構造を持つからである。つまり、一定の固定費がかかり、一人あたりの費用は規模が大きければ大きいほど下がってゆくという構造を持つからなのである。これは、鉄道や飛行機でも同じ。規模の経済が働く費用低減産業だからである。
 - ・しかし、鉄道と航空は違う。鉄道会社は線路や駅など固定設備、電車そのもの、職員が一体としてコストになる。ところが、飛行機は、空港は使用料のみ、航空機はリース、職員だけが固定という構造になっている。そのことから、航空は競争可能という意見が強まり、1980年代にアメリカから規制緩和（本来 deregulation は規制撤廃と訳すべき）がはじまっている。
 - ・航空会社は競争になって運賃が下がり、経営が厳しくなった。そのため、いかにして競争を回避するか、あるいは、競争可能でないような状況をつくるかを考え、マイレージ制度をつくった。これは利用者にスイッチングコスト＝他社に移動するためのコストをかけ、自分の会社の利用者として囲い込

むための方法である。1980年代以降、その他にも航空会社はできるだけ競争にならないような工夫をしてきたとあってよい。

- ・独占の教え方に関しても注意したい。教科書的には独占や寡占は、公正な自由競争を侵し、非効率や不公平を産むから独占禁止政策を実施するという記述になっている。しかし、自然独占は市場の失敗の一つであり、市場に任せてしまうと返って無駄が生じるため、あえて独占や寡占を認めているのである。
- ・だからといってそれを認めているだけでは問題もある。公共料金がそれで、みんなが使って大事だからということだけではなく、情報の非対称性や品質保証の意味などもあり、そうなっていることを理解しておいて欲しい。

3) 最後に、北海道の交通問題に触れたい。

- ・これに関しては、効率という言葉が間違えて使われている気がする。効率は無駄がないということで、コストカットだけを言っている訳ではない。鉄道を維持するには一日あたりの乗車数をみる必要がある。4000人以上が黒字、1000人までは微妙。それ以下は赤字である。
- ・JR北海道は、分割民営化によりそもそも経営が苦しいことは自明である。また、JR貨物から十分な路線使用料を受取っていない。そのような構造の中、人口減もふくめて明るい展望は少ない。
- ・今年の7月に経営改善の報告書が出ている。それでは、収入の増加策として千歳と札幌の路線などを整備して収益を上げること、鉄道以外の収入の道を探ること、費用を減らすこと、鉄道以外の輸送システムを考えることなどが提言されている。みんなで公共交通を支える努力が必要だろう。

【質疑】

Q：JR北海道はつぶれるのか？

A：鉄道だけでなくサービスを改善すると、維持可能な要素もある。メンテナンスなどJR東の支援も入っている。北海道は日本の食料庫であることは分かっているので、地域全体の効率を考えながらすすめることが大事である。

Q：講演とははずれるが、AIと生徒の進路の関係をどの程度考えるべきか？

A：例えば、港湾に関しては2030年の予想報告がでた。AIが入ることで、他の条件が変わらなければ仕事は減る。しかし、新しい仕事が必ずあるので、そういうことをいろいろ考えさせることが大事であろう。

Q：北海道の交通と雪の関係は？

A：雪のコストは高い。地域によって雪質も違うので、飛行場による差も大きい。今はネットワークなのでみんなで負担している。それは限界があろう

(3) 模擬授業「アベノミクスの金融政策を体験しよう」(上智大学非常勤講師新井明担当)

- ・午後から新井による模擬授業が行われた。参加生徒は3年理系「現代社会」の講座の37名である。
- ・授業記録は以下の杉田先生の当時の生徒配布用のプリントを元にしたメモで再現したい。なお、太字の番号はプリントの番号である。

チャイムと同時に開始 プリント確認 自己紹介

13:10~

1 【オークション】をやってみる

13:15~



オークションに参加する生徒

教室を2つに、教師側からみて右側と左側に分けて実施。真ん中の席に座る生徒は見学。

(中山先生と杉田が子ども銀行の紙幣をランダムに生徒へ配布)

<第1回 オークション> (新井先生が上智大学で購入した) 消しゴムとクリアファイルをオークションにかける。

オークションの様子：落札者は本当に消しゴムとクリアファイルをもらえるので、生徒はどんどん挙手して、オークションに参加。とてもテンポが良い。参加する(できない)生徒もオークションの過程をしっかりと見ている。あちこちで「なぜそんなにお金持っているの？キリスト教なのに…」とのつぶやき(不満 参加できなくて残念)も出ている

⇒落札価格

消しゴム 28000 円

クリアファイル 35000 円

(各生徒に配布されたお金の格差があり、オークションに参加できる生徒が少なかった)

<第2回 オークション>

⇒落札価格

消しゴム 30000 円

クリアファイル 70000 円

生徒のつぶやき 「なぜこんなにお金持っているの？」

【質問1】

この間(オークション)に何があったのだろうかどうして値段が違ってしまったのか？

→「なぜ？」ヒント「しかけがある」から

【質問2】

お金の量と落札価格の関係はどんなものだろうか？

→(生徒を指名して)高くなる モノとお金があるから

新井先生、オークションを終えて、次の説明をする。

- ・左右の座席で配布された金額が異なる(向こうはお金が少なかった)ので、オークションに参加しにくいでしょう。
- ・お金の量が増えすぎると？→ハイパーインフレになります(ここでドイツとジンバブエのインフレの写真を投影する)

2 オークションのからくりを探究しよう

13:31~

新井先生が以下の恒等式を活用して説明。お金はぐるぐるどのくらいまわったのか？

(テンポが大変良い。一部の生徒はどこに「比例する」の解答を書くかまごつくものもいたがさすが、北見北斗の生徒は新井先生の流暢な説明についてきている)

$$M \times V = P \times T$$

(貨幣量×流通速度) = (物価×取引回数)

- ・今回のシミュレーションはVとTはそれぞれ1回と考えることができます。
- ・ということは、お金の量と物価の関係は、ほぼ 比例する という関係があることが推定されます。
- ・この恒等式は貨幣数量説といいます。=交換方程式 恒等式といいます



- ・この式をもとにして、不況だったらお金をヘリコプターから撒いてしまえといった経済学者がいます。上の写真の人物。教科書にもでてくるアメリカのノーベル経済学賞をとったこともある経済学者です。だれだろう？

答え： フリードマン

3 アベノミクスの金融政策を検討する

13:40~

- ・アベノミクスの金融政策(クロナノミクス)はこの貨幣数量説に近い政策とされています。(インフ

レターゲット政策、リフレ派とよばれるブレーンが日銀に)

- ・アベノミクスの金融政策は、2013年4月からはじまりました。なぜこの政策が必要だったか、ヒントは「失われた20年」という言葉にあります。(センター試験問題参照)
- ・内容は、「異次元の金融緩和、量的・質的金融緩和」です。
- ・目標は、消費者物価を2年後には前年比2%にあげる、をぶちあげました。そのために、マネタリーベースおよび長期国債、EFT(上場投資信託)の保有額を2年間で2倍にする。としました。

【質問3】それから5年たちました。アベノミクスの政策はうまくいっているのでしょうか？まずは二つのデータから読み解き、判断してみてください。 13:51~

新井先生、女子生徒を指名し、上記のワークシート【質問3】の前までを音読させる。

アベノミクスには、お金をばらまき、人為的にインフレを起こす政策である。だから、今日はお金の量に注目してほしい。ちなみに、質的緩和は「金利」であるとの説明。

(この後ワークシートのグラフに即して説明。お金がどれだけ増えたかを生徒に理解させている)

ここでプリントの参考資料にあるセンター試験の問題にも注目させた。一部生徒はワークシートが突然飛んだので混乱していたが、すぐに周囲を見回してセンター試験の問題の位置を把握。

この判断をするコアはベースマネー。クロダノミクスは成功したのか。論理的に考えてください。3.7倍ベースでマネー出したのに…。

生徒「回っていない！」

4 アベノミクスを評価する

- ・3では、数少ないデータと理論からアベノミクスの金融政策を判断しました。
- ・ほかのデータからは、どんな結果がでているのでしょうか？

【質問5】次のデータから、アベノミクスの効果を判断してみよう。 13:59~

新井先生が、③日銀短観の変化 ④完全失業率の変化 ⑤日経(株価)平均を利用して今日の授業をまとめる。

ワークシートp4 【質問6】を利用して、アベノミクスで得した人、変わっていない人、金融緩和の影響で、お金が暴れ出したらどうなるか、を問うてゆく。

→お金は足りないのも、多すぎるのもダメ

では、どうすれば良いのか？

→カギは出口戦略。この言葉に注目してください。

3分ほどオーバーして授業を終了する。

【参加した先生方との質疑】

Q: この授業はアベノミクスの批判の授業か？

A: そういう側面もあるが、体験とデータをもとに問題を考えるという趣旨の授業として構想している。何かの結論を誘導するような授業ではない。

Q: ヘリマネというのは異常な感じがするが、なぜそんな発想がでてきたのか？

A: (加藤先生が回答) 1970年代のスタグフレーションの時代にケインズ政策では対処できなかったことがあり、その発想がでてきた。経済政策の理論の歴史を踏まえて理論を捉えて欲しい。

Q: お金をばらまいて投資をさせるような教育よりも額に汗して働くことの大切さを教えたいと思うのだが？

A: 愚直に働いて価値を生み出す。それも有り。しかし、もう一方で、この現実を活用する突破する試みを励ますような教育も必要では。

Q: やはり北海道のオホーツクの現状を教える教育が必要では？

A: これもその通り。ただし、全体の状況のなかでの地域という観点も大切。また、地域の経済を考え

るなら必然的に地域の利益を代表する意見を出す政治勢力の形成なども考える必要がある。公民教育の「政治・経済」は、「・」をとって「政治経済」であるはずで、それは有権者教育にも通じるはず。

【当日受講した生徒の感想および疑問の一部】

- ・ 出回るお金が増えても日本人の貯金志向から物価にそれほど反映が出ていないのでは？
- ・ 政府の消費者へのお金を回らせる働きかけ（投資など）が少ないのでは？

- ・ 全体として収入を得る人が多くなるかもしれないけど、使うための時間がなかったり、将来も安定して収入が得られるかどうか見通しがつきにくいと、お金を貯めてしまって流通しなくなる。国民がお金を使うようになるには、政策が不十分だと思う。

- ・ 失業率のグラフから考えるとアベノミクスは成功しているようにも見えるのでは？
- ・ 世の中にお金を出すよりも、部分的に底辺層の経済を活性化させた方が、結果として全体の経済が良くなるのではないかと？アベノミクスは机上の空論であり、もっと労働者の主観から政策を考えた方がよい。
- ・ 私は、アベノミクスは失敗していると思う。マネタリーベース残高を増加させているにも関わらず、物価指数はそれほど上昇していない。このデータから人々はお金を貯めこんでいることがわかる。しかもその貯めこんでいるのは高所得者の人々だ。通常低所得の人はお金を手にすると、生活をより豊かにするためにそのお金を使いがちである。一方、高所得者は既にモノが揃っているので使う必要がない。このような理由から、アベノミクスによって高所得者がより儲けただけといえる。

- ・ アベノミクスで目標を達成していないのに、なぜ消費税が10%になるのだろうか？
単にお金を回すことを考えるのも大事だけれど、さらにお金がまんべんなく地域、企業に回していくことが金融政策にとって大切なポイントだと思った。失業者を減らすことも大事だが、給料や仕事への満足度を高めることが今後の課題ではないかと感じた。

- ・ アベノミクスのような政策の海外先行事例はあるのだろうか？
- ・ 貨幣量が多くなっても物価が高くないのは流通速度が遅いからというのはわかったが、流通速度を速めたら急激に物価が上がってしまう。
- ・ お金をただばらまくのでは、ずる賢い人はお金を不正に使用したりプールしたりする可能性があるが、そういうことへの対策はあるのか？
- ・ ヘリマネに加えてマイナス金利政策まで行っているのに、それでも物価があまり上がらないのはなぜか？
- ・ これ以上のいい方法がないからずっとアベノミクスが続いているのだと思った。
- ・ 大企業で製品を作るような職は消費者の購買意欲が高まり製品が売れるので利益が出ると考えられるが、農林水産業や土木・肉体労働系のような職に同程度の利益があるといえるか？

- ・ 地域差や職業から考えると2択では考えられないのでは？

- ・ 地域別のグラフからもアベノミクスのグラフを見なければならない。

- ・ アベノミクスで良い方向にはいかないのではないかと不安に思う。でもそれを全て首相に押し付けるのではなく、私たちも理解して考えなければならない。

- ・ 外国や過去と比べるなど、もっと広く学んで自分でアベノミクスを評価できるようになりたい。

(4) 総括

- ・ 講義と模擬授業という二本立てのWSであった。参加者も多く、熱心に受講し、授業見学を行った。また、質疑も地域の課題、問題意識を踏まえたものが多かった。経済教育のこの種のWSはオホーツ

ク管内では初めてであり、これを契機に経済教育の芽が植えられることを期待したい。このような企画を立案、実行した北見北斗高等学校の山崎辰也教諭および参加生徒、参加された先生方に感謝したい。

- ・生徒の疑問に対しては、後日返答する予定である。
- ・なお、記録者である杉田先生から以下のような後半の授業に関する感想が寄せられている。参照していただきたい。

<参考になった点>

- 1 活動型の内容をうまく授業の導入（つかみ）で入れている
→やはり「つかみ」は大切 4月も、単元のはじめも 毎回の授業のはじめも
→教育学や方法学の知見をしっかりと新井先生は活用している
- 2 やはり何といてもディシプリン（専門分野）、金融政策（リフレ派の経済学の有り様が）新井先生の中で整理されている
→ディシプリンとしての恒等式 貨幣数量説などの専門用語をきちんと説明し解説している姿勢が素晴らしい
→新井先生この姿勢を若い世代にしっかりと伝統継承していく必要がある
→経済学の金融分野を、生徒がイメージできる言葉で説明している
→生徒は山崎先生から金融政策の前まで、どのくらい金融の基本的な知識を得ているか分からないが、今回の授業で生徒は新たな「問い」が生まれたように思う
- 3 アベノミクスの成否の分析を通じて「頭の汗」をかかせるために、ワークシートに出典を明らかにしつつ、必要な統計が適切に入れられている
→具体的な数値を、クールに分析する貴重な経験に、生徒はなつたはず（楽しんで、データは資料集ばかりに頼るのと大違い）
- 4 今回の授業の内容はとても抽象度が高い内容 しかし、新井先生はこの見えにくいアベノミクスの成否を「見える化」しようと試みたこと
→私もワークシート、授業の理論的背景、学ぶ概念、理論のデータを頂いているので、津田沼バージョンに変換して実践してみようと意欲が湧きました
→これは決して「追試」ではありません 金融政策は用語の記憶はできるとしても、何を目的に、どんな手段をとって、実際におこなわれるのか、「見える化」が大変難しい
→生徒は、ドイツのように、「なぜお金をたくさん印刷したのにインフレにならないの？」と素朴な疑問が出てきたのではないのでしょうか お金の流通速度、緩和量、日銀当座預金内だけでの緩和？ など、考えさせる手立てはたくさんありそうです
→新井先生に対する生徒の素朴な疑問から、アベノミクス、金融政策、道東の地域性の問題も含めて、今回のWSで経済学習がさらに広がる可能性があると感じました

<残念だった点>

- 1 新井先生の専門性が故に、学習する内容が多すぎた点
→ワークシートに即して淡々と進めれば、【質問6】まできちんと整理できたのではないのでしょうか。さらに精選すれば、余裕を持ってグループワークに時間をかけられると思う。
- 2 生徒がどこに学んだ内容を記録するか、何を学んでいるのか、はっきりさせなかった点
→これは飛び込み授業なので、どこ何を、説明をしているのか、どこにメモすればよいのかなど、生徒から声が上がらないのは、仕方がない部分でもある。北見北斗の生徒には、センター試験での正解へいたる過程の説明は効果的だが、私ならば、「学んだ内容を活かして」最後の一言で解説か、「見ておけ」位の指示にしようと思った。

・記録と文責：新井（前半と全体のまとめ）、杉田（授業記録）